

氏 名	中村 友代
学 位 の 種 類	博士（芸術学）
学 位 記 番 号	博甲第 9158 号
学位授与年月	平成 31年 3月 25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学位論文題目	アレクサンドロス大王の表象研究—イメージの生成と変遷
主 査	筑波大学准教授 博士（芸術学） 寺門 臨太郎
副 査	筑波大学教授 Dr. Phil. 長田 年弘
副 査	筑波大学准教授 博士（芸術学） 林 みちこ
副 査	帝京大学教授 森谷 公俊

論文の内容の要旨

中村友代氏の博士学位論文は、アレクサンドロス大王（以下アレクサンドロス）の肖像作品を中心とする表象全般を考察の対象とし、美術史における変遷とその時代背景について体系的な考察を試みている。その要旨は以下のとおりである。

序章では、アレクサンドロスに関わる研究史を概観し、美術史における先行研究と問題の所在を整理している。必要な概括を踏まえ、本稿の研究目的と課題について述べている。

第1章では、アレクサンドロスの肖像と表象一般に関する先行研究をまとめている。第1節においては、アレクサンドロスの存命期と死後まもない時期に、肖像制作に関わった芸術家たちと作例に関する記述に関して、主に文献資料に基づき整理している。第2節では、文献資料の記述や美術作例に見られるアレクサンドロスの身体的特徴と気質について検討している。アレクサンドロスは、自身の肖像を注文する際に、従来の権力者の肖像が好んだ理想的な様式ではなく、自身の身体的特徴を表現した作品を制作させたと考えられている。第3節では、アレクサンドロス彫刻作品の頭部に焦点を当て、その様式上の分類についてまとめている。

第2章では、アレクサンドロスの、公的な肖像を制作する権利を有していたと伝えられる、画家アペレス、彫刻家ピュルゴテレスおよびリュシッポスの三人の芸術家に焦点を当て、彼らが制作した代表的なアレクサンドロス肖像について考察している。第1節では、アペレス原作を手本として制作されたと考えられている《稲妻を持つアレクサンドロス》および《アレクサンドロス・モザイク》について取り上げている。第2節では、ピュルゴテレスとの関連が指摘される数少ない作品である《アレクサンドロスのカメオ（カメオ222）》および《ネイソスの彫玉》について検討している。第3節では、リュシッポスの作風や技法について概観し、失われた原作とその模刻とされる《アザラのヘルメス柱》、《槍を持つアレクサンドロス》および《グラニコス・モニュメント》について考察している。

第3章では、確立されたアレクサンドロスの肖像が、東方遠征を経て変化していく過程について考察している。エジプトのアモン神殿の訪問以降、アレクサンドロスは、神の系譜に連なる特別な存在とし

て振る舞い、また美術においてもその表現と様式を変化させたと考えられている。この時期以後の顕著な変化の一つとして、鑑賞者に対する配慮について言及している。第1節では、ルクソール神殿（聖舟祠堂）浮彫群を取り上げている。壁面に彫られた、伝統的なファラオの姿をしたアレクサンドロス肖像と、彼の称号と功績を讃える碑文について調査している。本作には、アレクサンドロス自身よりも、エジプトの神官や部下たちの意向が強く反映していたと結論づけている。第2節では、「象のメダリオン」と呼ばれる一連の類似した図像を有する貨幣のうち、《ボロス・メダリオン》について考察を行っている。この作例は、東方遠征によりアジアの王となったアレクサンドロスが率いる多民族軍の勝利と、ゼウスだけでなくアモンをも連想させる稲妻を手を持つアレクサンドロスの、特別な神性を示そうとしたと結論づけている。

第4章では、前323年の、アレクサンドロスの死の直後における表象の受容と活用に焦点を当てている。とりわけ、東方遠征における、被征服側の権力者たちによるアレクサンドロス肖像の図像と様式について検討を進めている。アレクサンドロスの死後、王への配慮が必要でなくなったため、彼の肖像は個々の注文主の意図を反映した自由な姿で表され、また、芸術家たちの個性を強調するモチーフの一つとして成立したことを論じている。アレクサンドロスの肖像作品が、独立した肖像類型として確立する過程の初期段階と位置付け、その諸相について考察を試みている。第1節では、《クラテロス・モニュメント》を、第2節では、ヴェルギナの墓壁画《狩猟画》を取り上げている。それぞれの構図や人物表現について、アレクサンドロス美術と権力者たちの美術の類似を指摘し、被葬者と注文主の表現など主に解釈について検討している。

第5章では、東方遠征においてアレクサンドロスの支配を受けた、被征服側の視点に立ち、表象の受容と活用について考察している。被征服地の権力者たちは、アレクサンドロスの肖像を模倣することで、自らの地位を守り権力を正当化しようとしたと考えられる。その顕著な例として、本章においては《アレクサンドロス石棺》を取り上げている。第1節では、先行研究史を概観し、第2節では石棺浮彫「アレクサンドロス大王の戦闘場面」に焦点を当て、先行研究における主題と人物に関する解釈を整理し再考察を行っている。「アレクサンドロスの戦闘場面」においては、ペルシア人に対する勝利よりも、神格化の表現を通してアレクサンドロスを讃える、より個人的な記念の意図が強く働いたと指摘している。第3節では、《アレクサンドロス石棺》浮彫上の、一般にいずれもアレクサンドロスを表しているとされる二体の騎馬像（A1 および B3）に焦点を当て、その肖像表現について比較検討を行っている。

以上の考察から、論文全体の総括として、アレクサンドロスの表象やその表現意図について、東方遠征の開始やアモン神殿への訪問、あるいは彼自身の死を契機とする変遷を再検討し、あわせて、父王の美術表現、注文主の表現意図、被征服国の人々への配慮などが、従来考えられてきた以上にアレクサンドロス表象の生成と展開に影響を与えていたことを指摘している。

審査の結果の要旨

（批評）

本論文は、最初に、アレクサンドロスの存命期の公的な肖像表現の確立、東方遠征以後の変化についてそれぞれ考察を行い、続いて、アレクサンドロス死後の、肖像作品の受容と政治的利用について検討を進めている。美術史上に名高い、数多くの重要作を取り扱っているために、先行研究についてより一層調査すべき作例が見られるが、ただし、アレクサンドロス表象の歴史的変遷の全体を渉猟することにより、具体例の解釈にまで踏み込む新しい歴史的文脈の解明に成功していることを指摘したい。とりわけ、ヴェルギナの墓壁画《狩猟画》および《アレクサンドロス石棺》浮彫の解釈に関しては、こうした解明なくして得られないコンテキストを提示し、注文主と被葬者に関して蓋然性ある解釈を導出している。

平成31年1月22日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。